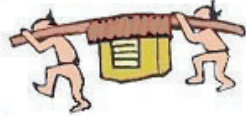


むかし「局アナ」いま「隠居」

御典医の人事異動



上田 博章(絵・文)

1933年徳島市生まれ 大阪府在住
 ■京都大学農学部林学科卒業
 ■元朝日放送アナウンサー
 ■元池田マルチメディア代表取締役
 ■講演、朗読指導など以外は隠居中

人事異動の季節です。

今回は 徳島藩の 或る人事異動について お話することにしませう。

一八六九年（明治二年）、京都に駐在していた徳島藩御典医の賀川家八代、賀川文煥（玄道）のもとに、「徳島ノ城下ニ転勤ヲ命ズ」という辞令が届きました。



先祖代々住み慣れた京の都から 海の彼方の徳島へ移住せよというのです。

産科医の名門、賀川家の医師を召し抱える徳島藩が、どうして名医を京都に駐在させていたのでしょうか？

参勤交代制度のもとで、大名の奥方は江戸、側室は国許で暮らしていますから、奥方の出産が迫りますと、京都の御典医は、東海道を下って 江戸藩邸に出仕し、側室が出産する場合には、海を渡って 徳島まで出張すればよろしい。

万々が一、奥方と側室が同じ時期に御懐妊とあらば、これは不義密通!! お家の一大事でございます。

そんな 参勤交代制度も一八六二年、文久の改革で人質のような状態で奥方が江戸の屋敷で暮らす必要がなくなっていました。

そこで蜂須賀家の奥方も、江戸から徳島へ帰ることになり、賀川家 八代 文煥も京都に駐在する必要がなくなつたのです。

*

賀川産科を興した初代の賀川子玄（玄悦）は元禄13年（一七〇〇年）彦根の農家に生まれましたが、産科医を志して京都に留学しました。苦学しながら修行に励み、実績を重ねた子玄は京都の壬生に 産科医院を開業し、努力の甲斐あって天皇家の御用を承る名医となります。

やがて 子玄のもとには全国各地から弟子が集まり、産科医界の泰斗と言われていました。

何かにつけて一流好みの徳島藩 第十代藩主、蜂須賀重喜公からの御沙汰で、

「是非、当藩の典医として召し抱えたい」

…という強い要請でした。何しろ、相手は殿様です。無下にお断りするわけにも参りません。

いろいろ交渉した結果、「子玄 高齢に就き御典医の名義のみを頂戴し、御用は婿養子、子啓（玄迪）が承る」ということで折り合いがついたようです。

* ㊦

こんなことがあつてから50年が過ぎた一八三三年（天保四年）、徳島城の外濠近くにあつた 商人の家に、女の子が生まれました。

「たけを」という男みtainな名前が付けられたこの子も当時、どこの商家もそうであつたように14歳で奉公に出されたのですが、そこは、御城下に一軒しかなかった産科医院で、家から歩いて二、三分のご近所でした。

幼い「たけを」でしたが、難産の修羅場に遭遇しても臆することなく立ち働き、

見よう見まねで身に付けた分娩介助の体験が 彼女の天職となつたのです。

一人前の「産婆」になって独立した彼女は不眠不休の激務も颯爽とこなす強靱な体力で御城下を駆け回り、やがて蜂須賀家の御用をも務めることになりました。

駕籠に乗ったまま大手門、下乗橋から黒門を通り抜け、表御殿の玄関前で やおら駕籠から降りるといふ…、当時の女性としては異例の待遇を受けていたのです。そうこうしているうちに、

「女性の典医として士分に取り立てる」

という御沙汰を頂戴した「たけを」はここで上田姓を名乗ることになりました。

申し遅れましたが、実は私、「たけを」の身内として、「たけを」の弟、上田精義の曾孫なのです。

*

ちょうど そんな時期に、産科医界をリードしていた賀川家嫡流、八代目の賀川文煥が、京の都から徳島の城下へ赴任して来たわけで、この人事は 徳島の関係者

からすれば、

「天から名医が降ってきた」
：ような出来事でした。

特に「たけを」とっては、
新時代の医学を身に付けた
産科医の出現は 願ったり
叶ったりのチャンスだった
に違いありません。

そして、この人事異動が、
賀川家と、徳島の上田家を
結び付ける契機となったの
です。

それまで何代にもわたり
京都から徳島まで出張診療
していた賀川家の医師達は、
城内で寝起きしていたので、
徳島の街に知人はいないし
土地勘ありません。

一方、地元民「たけを」は、
地域に密着した産婆として
活動している現役であり、
蜂須賀家の信任も厚かった
ことから、京の都から来た
文煥にとって、「たけを」が
重宝な存在であったことは
確かでしょう。

やがて賀川家と上田家の
間には 師弟関係が築かれ、
文煥が養子に選んだ綱忠も
その子 一郎も、産婆と力を
合わせて 地域に貢献して
きたのです。

この時期「たけを」は既に
結婚していて男児を得ては
いたのですが、産婆の跡を
継ぐ女兒に恵まれることは
ありませんでした。

そこで「たけを」は弟の娘、
つまり、姪である「さと」を
跡継ぎと定め「産婆の修行」
「免許状の取得」だけでなく、
当時の女性としては最高の
教養一般を身に付けさせ、
一人前の産婆に育ったのを
見届けてから自分は 67歳で
隠居したのです。

当然、「さと」に二代目を
襲名させる段取りでしたが、
「さと」は、同じ名前では
畏れ多いとして片仮名で
「タケヲ」と名乗りました。

この二代目「タケヲ」が、
私の祖母で、私が産まれる
とき取り上げてくれた産婆
でもあるわけです。

一九三三年（昭和八年）の
十月：天皇陛下より二ヶ月
早く生まれた私は不覚にも
臍の緒を首に巻きつけて、
仮死状態のまま この世に
姿を現したのだそうですが、
そんな 死に損ないの私を
取り上げたのが当時 61歳の
「タケヲ祖母ちゃん」でした。

朝日新聞の徳島版には、
「明治 大正 昭和にわたる
産婆生活 50年のあいだに
上田 タケヲが 取り上げた
新生児の数は一万二千人に
及んだ」

と記されていました。

二代目の看板を背負った
タケヲは 先代の七光りも
あって、同業者に妬まれる
こともあったと思います。

しかし 頼まれれば絶対
断らないのが二代にわたる
上田のお家流でした。

「〇〇〇の子沢山」のお宅
からはお金を頂戴できない
場合が多く、妬まれるほど
豊かな生活は出来なかった
ようです。

*

そもそも産婆というのは
「24時間体制」の「3K仕事」
：だけでなく、あの時代は、
「お産は穢れである」

「陰でひっそり産むものだ」
と言われていました。

おまけに「性」がタブー視
されていた時代でしたから、
職業差別もあったようです。
近頃は世の中も、産婆も、
産科医も、変わってきたの
ではないでしょうか。

長いあいだ「産婦人科」と
呼ばれていたのが「産科」と
「婦人科」に分けて呼ばれる
ようになりました。

「産婆」も、戦後は「助産婦」
と呼ぶようになっていきます。
若い人にとって、自分の
職業名に「婆」が付くのは
嫌なのでしょう。

21世紀になると、法律が
改正されて、助産「婦」が
助産「師」に変更されました。
「婦」が「師」に変わっても、
男性の助産師は認められて
いませんけど…。

産婆の正式名が助産師に
変わって 五年ほどあとに、
私は『産婆二代記』という
本を自費出版しました。



この本を書くにあたって
図書館に通ったり、ネット
検索したりする傍ら、京都
玉樹寺に眠る 子玄の墓に
手を合わせ、次いで徳島市
在住の賀川本家 11代、賀川

明孝・悦子夫妻を訪ねたの
ですが、そのとき明孝氏が、
「あなたの 曾祖父さんが、
書いたんとチャウか？」

こう言つて奥の書斎から
持ってきた数枚のコピーを
私に差し出すのです。

それは確かに 曾祖父が、
「大正天皇 御大典記念」の
出版物に寄稿した、

『藩政下の 医師と 学校』
と題する小論文のコピー
ではありませんか。

藩政時代の蘭方医だった
先代「たけを」の弟、つまり
私の曾祖父「上田精義」が
記した文語文の原稿でした。

これが『産婆二代記』を
書いたときの貴重な資料と
して大いに、役立ったのは
言うまでもありません。

私が『産婆二代記』なる
本を書いたことによつて、
曾祖父の小論文に 出逢う
ことができただけでなく、
戦争前から何十年も疎遠に
なっていた賀川家と上田家
とのお付き合いが復活した
わけです。

これこそ、上田家二代の
ばあちゃんのお引き合わせ
だったに違いありません。